



第85回日本皮膚科学会東部支部学術大会
The 85th Annual Meeting of the Eastern Division of JDA

ランチョンセミナー7

アトピー性皮膚炎・遺伝性角化症 :病態と治療戦略

座長

山本 明美 先生(旭川医科大学)

阿部 理一郎 先生(新潟大学)

演者

氏家 英之 先生(北海道大学)

「アトピー性皮膚炎の病態と治療戦略」

乃村 俊史 先生(筑波大学)

「遺伝性角化症でみられるrevertant mosaicism」

日時

2021年9月19日(日)12:30～13:30

会場

第1会場【ロイトン札幌 3F ロイトンホール(A+B)】

本セミナーはWEBでのライブ配信もおこないます。

視聴方法は学会ホームページ(<https://eastjda85.jp/>)をご覧ください。

NOV

アトピー性皮膚炎の病態と治療戦略

北海道大学 氏家 英之 先生

アトピー性皮膚炎は、表皮バリア機能障害を伴うアレルギー性皮膚疾患である。保湿を主体としたスキンケアやステロイド外用、タクロリムス外用が治療の中心であるが、病態解明が進むにつれて、様々な因子をターゲットとした治療薬が臨床応用されつつある。搔破の刺激を受けた表皮角化細胞はAlarminと呼ばれるIL-33やTSLP、そしてIL-25を産生し、2型自然リンパ球を介してTh2細胞優位のType 2炎症を誘導する。Th2細胞に由来するIL-4やIL-13、IL-31は神経に直接作用し痒みを引き起こす。IL-4やIL-13を阻害するDupilumabや、その下流のJAKを阻害するDelgocitinibやBaricitinibは炎症や痒みの抑制に加え、皮膚バリア機能の改善も期待できる薬剤として注目されている。また、新たな治療ターゲットであるIL-31も、痒みのみならずバリア機能との関連が示唆されている。新規薬剤が次々と上市される中で、私達は各薬剤の作用機序や特徴を十分に理解したうえで治療選択を行っていく必要がある。本講演ではアトピー性皮膚炎の病態を解説するとともに、今後の治療戦略について考察する。

遺伝性角化症でみられるrevertant mosaicism

筑波大学 乃村 俊史 先生

遺伝性角化症では、患者皮膚の一部のケラチノサイトから遺伝子変異が消失し、臨床的にも組織学的にも正常化した皮膚領域を生じることがあり、この現象はrevertant mosaicismと呼ばれている(revertantは遺伝子変異の正常化、mosaicismは同一個体中に遺伝的に異なる2種類以上の細胞が存在することを意味している)。演者の研究室ではこれまでichthyosis with confetti、ロリクリン角皮症、毛孔性紅色秕糠疹5型でこの現象を確認し、報告してきた。一般的に稀と思われる現象ではあるが、演者が北海道大学在籍中に担当していた魚鱗癬の専門外来には自然治癒した皮膚領域を持つ患者が5名以上通っており、revertant mosaicismの診察のコツさえ掴めば、決して稀な現象ではないことを納得いただけるものと確信している。本講演では、遺伝性角化症で見られるrevertant mosaicismの臨床的特徴やその発生機序について、わかりやすく解説したい。